



まいこめプロジェクトレポート「田植え編」

～自然溢れる集落で、子どもたちによる自然米作り～



長老：「いち、にい、さん…しほん！」
新人：「…??」
ベテラン：「『よんほん』ね(笑)」

今年には新人の植え手も迎え、はじまった5年目のまいこめプロジェクト。言葉(方言)も社会環境も都会とは一味異なる鳥取県・新田集落で、体をいっぱい使って、田植えを楽しみました。昨年の風雨とは打って変わり、5月としては記録的な暑さとなった鳥取県。果たして、一同は最後まで植え切ることができたのでしょうか。



(写真左) 田植えとカエル捕獲をマルチでこなす姉妹。「ママ、冷たい～」と言っていた2年前に比べ、泥の中に勇敢に(カエルを追って)駆け出していく妹さんの様子はとてもたくましかったです!(写真中) 男子陣も勢力あげて頑張ります。しかし好奇心旺盛な彼らのフィールドは田んぼにとどまらず、畦そして川へと徐々に移動していくことに…。(写真右) まさに日本社会を反映したような「働き手不足」に悩む中、最後まで辛抱強く田んぼにとどまったのはこちらの二人。今回のMVPに決まり!



田植え機を起動する長老：
「ブン、ブン、ブーン~!」
子ども：「あかんって!機械とめて!」

マニュアル vs 機械 あなたはどっち?



今ではまいこめの風物詩となった「田植え機との格闘」。毎年、手植えでは終わりそうにないため、長老さんが田植え機にのって背後から攻めてきます。しかし今年は一味違いました。何人かの子どもたちは機械を頑なに拒み、自分たちの手で植えることに拘りました。ここで見出される「マニュアルと機械」の対立。君たちがこれから生きていく未来でも重要なテーマとなることでしょう。

そもそもこうした農作業体験ではなぜ「手植え」にこだわるのでしょうか。今や手植えで行なっている稲作農家はほとんどいないでしょう。何ヘクタールもマニュアルでできるわけがありません。だから一年365日のうちたった1日しか稼働させないにもかかわらず、一機約100万もする田植え機を買わざるを得ないのです。それでは手植えは、農業の理解を目指す上で失格なのでしょう。

子どもたちの気づきをもとに、手植えの意義を考えてみましょう。同じ作業を延々と数時間も繰り返す手植えは精神的にも辛いものでしょう。だからこそ、機械による効率化の大切さが分かるのです。生産のプロセスを知り工業化を訴えるのと、プロセスに無知のまま工業化を訴えるのでは説得力が圧倒的に違います。将来自らの経験に基づいた説得的議論を展開できる大人になってほしいからこそ、今は手植えでいいのです。プロセス自体の大事さ(カエルなど生態系、田植えによる付加価値)も理解できるのです。



(写真左) 田植えを終えた一同、休んでいる暇はありません。集落の知識人・津田さんの案内のもと、食べられる山菜を獲りにいきます。今年は、わらび、たけのこ、しゅうど、みょうがあたりが狙い目でした。(写真左中)「蛇、いたぞ〜」という一声とともに、子どもたちが走り出します。なかには「食べるぞ〜!」なんて声も聞こえます。誰から教わったのでしょうか…(以前マムシを捕獲し、コリコリ揚げにしたからでしょう)。(写真右中) もはや風物詩となった溪流でのサワガニ捕獲。今年は何匹とれたのでしょうか。(写真右) 筆者もうなるほどの絶品、自生の「みょうが」です。まっすぐ引っこ抜くとぼきと折れてしまうので、斜めに回しながら抜くのがポイントだそう。みょうがが食卓にのぼらないご家庭も多いのではないのでしょうか。こうした自然体験での新しい食材とのアクシデンタルな出会いは、子どもたちの味覚のレパートリーを増やすことにもつながるのです。



(写真左) 集めた山菜は、集落のおばあちゃんたちがさっとゆがいてくれました。湯を通すと山菜の緑と白がなんと鮮やかになることか! (写真左中) 茹でた山菜は、特製の酢味噌につけていただきます。まるでアーティチョークを食べるように、みょうがの白い先っちょ部分を「チュルッ」と吸って食べるのです。美味い! (写真右中) お待ちかねの山菜天ぷらです。油で包むことで、山菜特有の苦味を感じることがなくなります。これも美味い! (写真右) 集落のおばあちゃんたちが、智頭町のお米を使っておにぎりを握ってくれました。寒暖差の激しい智頭町のお米はやっぱり美味しい…。次回は是非火を起こして、釜で炊きましょね!

豆知識～長老さんとの対話の中から

日本の原風景のような棚田。しかしそもそもそれはどのように運営されているのだろうか。大きく分けて3つの可能性がある。一つ目は、個人が田んぼを何枚か所有して、自らで経営しているパターンだ。しかし、そうした零細の田んぼでは、機械を効率的にに入れることができず、なかなか収益が上がらない。二つ目は、経営を効率化するために、集落として経営するパターンだ。これを集落営農という。先に述べた高価な機械を数人で共有することでコストを抑えたりすることができる。三つ目は、集落の住民が「経営とは別の目的」で管理しているパターンである。今回の新田集落もこのパターンであり、そしてこれが中山間地域では最も多いものだろう。「経営とは別の目的」とはどういうことか。そもそも毎日の水の管理や、田植え、草抜き、収穫の労働コストを考えたとき、たとえ収穫物を販売したとしても、生産費の元がとれるような値段では米は売れない。経営としては「破綻」しているといえよう。それでも住民が稲作を続けるのは、田んぼを耕作放棄地にして草ボーボーにしないため、集落の景観を保全するため、先祖から受け継ぐ土地を守り抜くため、といった別の目的がある。こうした「経済」に還元されない状況が日本各地で発生していることを認識することは、将来の農業・農村のあり方を議論する上で大切であろう。



田植えの一週間後、引率のセイさんが草抜きに向かいました。今回は手で草を抜くのではなく、稲の列の間にびたつとはまるショベルのような道具で効率的に雑草を退治します。といっても、まだまだ雑草は元気に生えてくるので、常時草抜き部隊を募集しています!(次回は、6月22日(土)草抜き予定です)